



六甲山魅力再発見市民セミナー

市民セミナーVol. 129
再び、六甲山の景観計画を
考える / 中瀬 勲
2017年4月発行

第129回テーマ 再び、六甲山の景観計画を 考える

- 六甲山の景観マネジメント
- 森林レクリエーション
- 景観計画の発想

実施日：平成29年4月15日（土）
午前10時～15時00分
場所：六甲山自然保護センター、
記念碑台・散歩道



講師：中瀬 勲さんプロフィール

1948年大阪府生まれ。県立人と自然の博物館館長、県立淡路景観園芸学校学長などを兼任。大阪府立大学大学院修了後、カリフォルニア大学客員研究員、県立大学大学院教授、淡路景観園芸学校校長、人と自然の博物館副館長、丹波の森公苑長兼任を経て現職。日本造園学会会長など多くの公職を歴任。阪神グリーンネット事務局長等の震災復興のまちづくりに関わる。日本造園学会賞、兵庫県科学賞等を受賞。



円通寺の借景の庭

午前中はアセビの萌芽枝を調査

曇りのち小雨で11℃、スタッフ7名、見学3名の10名が参加。2班でアセビ切り株の萌芽枝を調査しました。開花が遅れていたクロモジやアセビが咲き出していました。午後の講演に20名が参加しました。



小雨の中、萌芽枝の調査

ランドスケープ専門で40年

中瀬さんは、高校時代からガーデニングや造園に関心が深く、大阪府立大学で久保 貞先生に師事されました。「新渡戸稲造、内村鑑三、宮部金吾の孫弟子だ!」とジョークまがいに言われました。札幌農学校第2期生のゴールドントリオの宮部金吾から、久保先生は日本の近代化の過程で、地域づくり、景観づくり、森づくりが大事だと教え込まれています。

1978年、久保先生からガレット・エクボの研究室に送り出され、28歳でアメリカへ単身赴任。エクボ先生は世界中にランドスケープを広げた、フレデリック・ロー・オルムステッド(右)の流れを継いでいます。初仕事はアメリカ側のナイアガラの景観計画で、1年後に「自然やから触らんとこう」という意外な結論に接し、「自然と接するための流儀」を学んだとのこと。日米の先進的な研究者の系譜にあり、「ややアメリカっぽい、かなり近代化の路線を歩んだ研究だ」と紹介されました。



1万年前から辿って、「都市山」までを解説

講演では、用意されたスライド「六甲・神戸 地域整備の過去・現在・未来」のI～VI章に基づいて、豊富な話題を織りこみながら話され関心を高められました。

まず「過去1万年、長い歴史上での六甲山・緑の変遷」で、照葉樹林から再び照葉樹林へと6期にわたる六甲山の移り変わりを紹介されました。続いて「近世100年、人為による六甲山・緑の回復」で、植林や風水害の被害、第二次大戦中の大木の伐採、戦後の盗伐による緑の荒廃を述べられました。

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：神戸県民センター、灘区役所、神戸市教育委員会

次いで「近世100年、レクリエーション開発の展開」で、別荘、ゴルフ場などの複合開発が先進的に進展したことを説明されました。そして「何故、六甲山は国立公園に」で、水の風景から森林の風景へへの転換と併せて、国立公園化の由縁を語られました。結論部分の「未来の六甲山は」では、「保全」の側面と「利用」の側面からトータル・ランドスケープとして課題を抽出し再確認する必要があると述べられ、さまざまな課題や、アメリカのボストン・コモンなどの参考事例を引用して提言されました。

パブリック・アートを例に、六甲山の山は行政が管理し、壁面のパブリック・アート「羊を徘徊」イベントは市民が運営する組織体で担うことを強調して、質疑応答に進められました。



壁面のパブリック・アート「羊を徘徊」

今後の六甲山を考える視点が磨かれた

12年振りに六甲山の景観計画についてお話しいただきました。「都市山」六甲山に至る100年以上の自然環境や人為活動の変遷、課題やヒントをお話しいただきました。改めて「市民が仕切っていく」ことを啓発されました。

詳しくは2ページをお読みください。

参加の感想 小谷寛和さん

初めてセミナーに参加しました。四季折々の森の表情を身体で感じるのが好きで、六甲山によく登っていました。これがセミナーで中瀬先生が言われていた身近な都市山六甲山の「生態系サービス」、森の恵みの恩恵だということに改めて感じました。また、セミナーの前に、まちっ子の森でのアセビの伐採調査も見学させていただきました。森では子どもたちの自然体験学習も10年以上続けられているとのこと、息の長い活動に感心しました。



【助成金をいただいている機関】順不同

大阪コミュニティ財団(東洋ゴムグループ環境保護基金)、

コープこうべ環境基金、セブン-イレブン記念財団、

GGG国立・国定公園支援事業